

空



2010・10

**SORA** 33号

# 秋風

柴田 佐知子

熟れ柿のあやふき皮となりにけり

秋風や釘抜けし穴やや縮み

猪の短き脚の縛らるる

桃すするどこか小暗き思ひかな

名将の貌して反れるいぼむしり

―「俳句研究」秋号より―

祝杯を顔の高さに夏館

叱られし子がもの言はぬ油照り

蛞蝓になる蛞蝓に触れし手が

信号に待たされてゐる祭馬

噴煙を叩きて阿蘇の大夕立  
蜻蛉の頭くるりと晴れ渡る  
噴煙を加へて阿蘇の罅雲  
草原は見事に暮れてきりぎりす  
安心の顔に老いたりセルの父  
縁側に出て伸ばしたる盆提灯  
いづれ皆去るこの世なり踊りけり  
八朔や母の起居は水のごと  
芋虫のちよつと進んで世に遠し  
札所ごと山は暮れたり衣被  
老人となりし父は雁わたる  
掛け軸を鯉の上れる月の夜

麦酒

あさなが捷

浮袋

苑実耶

誰かれを呼び込んでゐる夕端居

夏雲の湧き継いでゐる鬼瓦

沈黙に耐へられず干す麦酒かな

祭笛老若男女呼び寄せて

髪洗ふむかしは人にあやまらず

荒馬の手綱を捌く祭かな

前にならへ微調整するいわし雲

預りし子に泣かれゐる日の盛り

知らぬ子が家で食べをり地藏盆

買ひたての浮袋また膨らます

蛇穴に入りて女は家を出づ

海の幸山の幸待つ帰省かな

吹かれゐて秋の簾となりにけり

口開けて子の眠りゐる終戦日

喜寿の師に庭の茗荷をいただきし

砂けむり膝立てて座す運動会

## 土用灸

安武晨子

## 応援

小林朱夏

石灼けて脚下照顧の大伽藍

子に飼はれ子を生してゐる目高かな

一札を掲げ禪寺の土用灸

応援の父兄が傾ぐ運動会

蟻つぶし今生の罪重ねけり

鶏頭の賢き丈に揃ひたる

絞る的なかりし草矢天へ射る

瓢箪の不承不承に揺れてをり

みほとけに瓜の馬曳き灯しけり

はしやぐだけはしやいで散りし稲雀

帰省子へ問はず語らず茶を淹るる

列車また無月の闇へ出てゆけり

草笛の力を抜いて吹けば鳴る

毒蛇の毒出しきつて穴に入る

緑蔭の石のひとつに憩ひけり

冬瓜の転がるたびに傷増やす

赤とんぼ

秋

千

晴

炎天

吉

村

撰

護

夏の雲牛は四角に食んでをり

まんまんと水を湛へし箒草

赤とんぼ止まる所を探しをり

奪はれし兄は命みことの沖繩忌

自らも祭太鼓に酔うてをり

幻の線路の跡や鬼薊

歩道まで根の荒々と夏木立

線路横蚊柱立てて工事中

山ももの気怠き程に熟したり

箭を咬ます藁一筋や炎天下

集まればつましき話曼珠沙華

残暑なほサウナのごとき後架かな

縁側に程よく馴れし団扇置く

立秋や腰に鍼打ち灸据うる

爽やかや夫婦巡礼布草鮭

空作品抄 — 柴田佐知子抽出

机より始まる世界秋の夜

福岡

高倉和子

蓮の葉の露を廻してあそびけり

東京

中田みなみ

渡船にて残りし虫を売り了へる

長崎

荒井千佐代

揚花火闇に走り火またひらく

埼玉

服部早苗

滝裏にのぞくこの世の面白き

福岡

中条さゆり

領布振ればわれも佐用姫秋の雲

福岡

柴田志津子

追ひ山や大雨に混じる勢ひ水

福岡

大地真理

サングラス声かけられてとまどひぬ

うきは

高倉恵美子

空滝とは絶壁のこと雲の峰

熊本

松田明子

噴水のしぶきに縦の縞模様

長崎

鳳 蛮 華

ラムネ抜く陽明門の彩に酔ひ

福岡

樋口みのぶ

髪洗ふむかしは人にあやまらず

福岡

あさなが捷



買ひたての浮袋また膨らます

草笛の力を抜いて吹けば鳴る

鶏頭の賢き丈に揃ひたる

自らも祭太鼓に酔うてをり

線路横蚊柱立てて工事中

こぼれくる光は円し夏木立

海へ行く電車に蠅と乗り合はず

踊子となりて人目を奪ひたき

日の盛り胸中を行く枢かな

飾り置く誰れも吹けない瓢の笛

宇宙船帰りががんぼ壁叩く

好きな色みんな集めし水中花

夏の旅夫を忘れてしまひけり

玉虫や現世を越えし色放ち

須惠

行橋

糸島

粕屋

福岡

大阪

福岡

福岡

東京

糸田

粕屋

福岡

福岡

福岡

苑実耶

安武晨子

小林朱夏

秋千晴

吉村摂護

青木朋子

吉村摂護

矢野百合子

古川夏子

宮井知英

吉田葎

亀井紀子

田代貞枝

山内碧



足の指洗うてをりぬ遠花火

大阪

堀江恵子

向き合ひて日焼子同士よろこべる

神戸

石川叔子

黒百合や死んでもいいとは思はぬが

福岡

白水良子

花曇り寄せて祀れる五穀神

粕屋

長憲一

水かへて金魚のひれの太くなる

福岡

ふじの茜

朝虹に今日はよき日と決めにけり

須恵

長節子

ニンゲン国三十五階蟻迷ふ

福岡

栗原京子

水中花懸想ところがあぶくほど

八尾

田岡千章

かはほりの乱れて出口調査かな

宇治

池田華甲

愛しみは果実にも似て草の露

羽曳野

織田高暢

静脈浮く男の腕や西瓜食ふ

横浜

小川涼

連山にそうて雲立つ厄日かな

山梨

野畑小百合

振り花きちんと振れ自決の地

東京

山田正子

生身魂まだ八十の紅を引く

北九州

片田きく



幸せを形にすればピーチパフエ

東京

今井春生

御維新や清水港に恋の猫

萩

岸千手

取引先の蔭に他社品晩夏光

下関

乾有杏

打ち上る海月に波の遠ざかる

福岡

桜三奈子

盛り上がる雲の乱れず秋立ちぬ

山梨

中原俊之

地べたにてねずみ花火のごとき蠅

長崎

仲里奈央

盆の月空家となりし庭照らす

東京

遠山のり子

青空の中にアルプス山法師

東京

清水量子

素潜りの灘が地球を差し上げる

唐津

堤堅策

微笑みし母を落ち葉に埋められず

福岡

星原悦子

玻璃越しの守宮は足を花のごと

鳥栖

南友子

退職の報また届く晩夏かな

福岡

野田美子

冬あたたか介護を受くる身となりて

福岡

神谷耕輔

夕月や猫は誰にもかしらず

宇美

内藤玲二

# 空作品評

柴田佐知子

蓮の葉の露を廻してあそびけり 中田みなみ

子供の頃に、芋の葉の露でこのように遊んだことを思い出す。大きな葉の上の大きく美しい露。あまり大きく廻すと葉の端のバランスが崩れ、露が転がり落ちる。忘れていた童心を呼び覚まされた。中世の詩歌で詠まれてきた「露の世」「露の命」といった露もつこの世のはかなさというイメージに距離をおいたことで、類想にも遠い独自性が生まれている。

揚花火闇に走り火またひらく 服部 早苗

「花火」という素材で一句をなした「物仕立いちぶつじだて」の作品。

『俳句文学大辞典』で「一物仕立」をひくと、「一つ」の材料だけで一句をつくる句作法。取り合せ（配合）の方法に対する。「鶏頭の十四五本もありぬべと（正岡子規）」「帚木に影といふものありにけり」（高

浜虚子）「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」（飯田蛇笏）のように、主として季語を中心の材料として、一点に単一集中した鮮明な叙述をする。息が一本に通じ、かえって俳句独自の余韻と味わいを出す句法で、名句に多く見られる手法でもある。」と記されている。一物仕立で作句するにあたり。こころにしかと収めるべきは「鮮明な叙述をする」ことである。季語の説明であってはならないのである。早苗さんの句の眼目は「走り火またひらく」。筋なす火の先が闇に絢爛と色をひろげる。スピード感と色彩力鮮やかに描かれている。

滝裏にのぞくこの世の面白き 中条さゆり

どこの滝であろう。滝の後ろに人が通れる窪みがあるのだろう。滝水のカーテンの裏のような場所は、真夏でもひんやりとしていることであろう。轟々と落ちる滝の筋が世界を二つに分け、滝裏は冥界のような異質空間に変る。ここから自分が生きるうつし世を異界の如く見ることが出来るのだ。そして滝の裏を出た作者は、「面白し」と見た俗界へと戻ってゆくのである。（以下略）

# 空集

## 柴田佐知子選

新涼や上下自在の介護椅子

お迎への母に跳ねる子秋ぎくら

曙や耳より覚めて喜雨の中  
長崎 鳳 蛭華

埋草の花火尽くして大花火

短編の余韻引きずる熱帯夜

何にこの手足重たき昼寝覚

夏芝にドクターヘリの脚の跡

蜻蛉来る畳める脚の見ゆるまで

ひよんの実の画龍点睛穴ひとつ

自転車漕ぐ腰に浮輪を付けしまま  
糸島 小林朱夏

雄鶏の口籠りたる暑さかな

夜半の月枕の端に届きけり

仕舞湯に鈴虫の声入りくる

新藁の匂ひの中で後悔す

鬼灯の揉まれ揉まれて種を吐く

荒海の黒く寄せ来る葉鶏頭

裏山の萱が茅の輪となる朝

サーカスを見し境内の茅の輪かな

名を書いて我が形代となりにつけり

形代を見知らぬ人と重ねあふ

町の名は昔のままに荒神輿

尺竿で丈測られし祭馬

紙漉きの町水音の涼しさよ

鴉鳴くや道拡ぐるに墓を掘り

秋晴れや六年生の救護班

伐られたる杉山匂ふ秋遍路

猪垣に大地のうねり従ひぬ

猪の子のころころよぎる遍路みち

福岡 柴田志津子

熊本 松田明子